



コレクション展 スケールズ

2020年10月17日(土)
～2021年5月9日(日)

展覧会名	コレクション展 スケールズ
会期	2020年10月17日(土)～2021年5月9日(日) ※前期:2020年10月17日(土)～2021年1月31日(日)/ 後期:2021年2月2日(火)～5月9日(日)
休場日	月曜日(ただし11月23日、2021年1月11日、5月3日は開場)、 11月24日、12月29日～2021年1月1日、1月12日、5月6日
開場時間	10:00～18:00(金・土曜日は20:00まで、1月2日・3日は17:00まで) ※鑑賞券販売は開場の30分前まで
会場	展示室1～6
料金	一般 450円(360円) / 大学生 310円(240円) / 小中高生無料、65歳以上の方 360円 ※()内は団体料金(20名以上)。前売り券販売はありません。 ※美術奨励の日(会期中の毎月第2土曜日)及び市民美術の日(11月3日)は金沢市民の方は 本展を無料でご覧いただけます(要証明書の提示)。
主催	金沢21世紀美術館[公益財団法人金沢芸術創造財団]
お問合せ	金沢21世紀美術館 TEL: 076-220-2800

展覧会概要

ある物や空間について、思っていたより大きい、思っていたより小さい、と感ずることがあります。それは、その物や空間の「サイズ」のみによるのではなく、それを経験する身体の位置や視点、また身体に記憶されているものや空間との関係の中で相対的に生まれる経験です。本展覧会では、数値化することのできる「サイズ」に対し、関係性の中で伸縮する「スケール」に焦点を当てます。

それぞれプロポーションの異なる7つの展示室で、当館所蔵作家による作品をご紹介します。風景、空虚、音の響き、人の記憶、植物や無機物の持つ時間の流れ…作品が扱う世界は計測し難く、尺度を切り替えるたびに別の姿を現すでしょう。身体の中で絶えず構築される複数のスケールについて、考える機会となれば幸いです。

展覧会の特徴

作品と鑑賞者の間に生まれる「スケール」への考察

“鑑賞者がある作品に感ずる「大きさ」は、数値化される「サイズ」ではなく、それをとりまく環境によって伸縮する「スケール」として、相対的に経験される一。”キュレーターによるこうした考察を契機とした本展は、個々の鑑賞体験が、作品そのものが持つ物理的な情報に加え、それをとりまく環境一置かれた空間の広さや明るさ、鑑賞者との距離やバランス、さらには鑑賞者自身の記憶や時間の感ずるといった諸条件一が相関的に生む「スケール」によって有機的に変化することを示唆します。本展は、そうした作品と鑑賞者の間に生まれる伸縮自在な「スケール」と、その限りない組み合わせによる可能性を探求した、新感ずの展覧会です。

金沢21世紀美術館に蘇る、よみがえ展示機会が稀少なコレクション作品の数々

本展を構成する主な作品の一つ、記憶や帰属をテーマに創作活動を行うス・ドホが、過去に居住した空間を実寸大の持ち運び可能なファブリックで再現した《階段》(2003年)は、当館が開館した2005年のコレクション展示「アナザー・ストーリー」以来、実に15年振りの公開となります。また、藍の染色技法により自然の景色に高い抽象性と時間的な奥行きを現した福本潮子《霞の幔幕まんまく》(2002年) [前期]、街の片隅に捨てられたLED掲示板に着想を得、不規則に明滅する光が鑑賞者の身体感ずりに直に訴えるチェン・ウェイ《道端のマレーヴィチ》、《前代未聞の自由》(2006年)は、当館収蔵後、初めての公開となります。これら展示機会が稀少なよみがえコレクション作品の数々が、新たなコンセプトのもと、金沢21世紀美術館の展示空間に蘇ります。

デジタル時代における、リアルな身体感ずによる作品との出会い

デジタル技術の革新と普及により、私たちの日常は、日々生成される大量の「写真」を情報源として物事を判断する機会にあふれています。こうした行為が日常化する一方で、本展のコンセプトである「スケール」への考察は、ヴァーチャルな情報からだけでは迫り得ない、リアルな身体感ずを通じた対象との出会いと、その本質を問うています。現地に赴き、その空間に身を置き、五感を研ぎ澄まし、身体全体で作品と対峙する、そうしたなま生の体験によって呼び覚まされる、新しい身体感ず一「スケール」一を発掘しに、ぜひ展示会場へ足をお運びください。

出品作家
(アルファベット順)

チェン・ウェイ	ス・ドホ
福本潮子 [前期]	フィオナ・タン
イザ・ゲンツケン	田中信行 [前期]
アニッシュ・カプーア	ツェ・スーメイ [後期]
ギジェルモ・クイック	ペーター・フィッシュリ ダヴィッド・ヴァイス
宮崎豊治	ヴラディミール・ズビニオヴスキー [後期]

※出品作品は都合により変更になる場合があります

主な出品作家・作品

宮崎豊治 MIYAZAKI Toyoharu

1946年石川県金沢市(日本)生まれ、京都府在住。金沢美術工芸大学美術学部彫刻科卒業後は、木、鉄、銅、真鍮などの素材を用い、コンセプチュアル・アートの影響を強く受けた作品を制作。1979年より、作家自身の身体を中心に据え、様々な身体の部位のサイズや、身の回りの環境や風景、個人的な記憶を組み込んだ「身辺モデル」と題したシリーズを制作し始め、注目を集めた。1988年から開始された「眼下の庭」シリーズは、「身辺モデル」の形態を引き継ぎながらも、きわめて私的な作家自身の記憶を普遍的な表現に結実させたより深い作品世界となっている。



宮崎豊治《眼下の庭》1993
鉄、真鍮
H153×W165×D173cm
© MIYAZAKI Toyoharu
photo: SAIKI Taku

アニッシュ・カプーア Anish KAPOOR

1954年ムンバイ(インド)生まれ、ロンドン(英国)在住。

1973年に渡英し、ホーンジー・カレッジ・オブ・アート及びチェルシー・スクール・オブ・アート・アンド・デザインにて芸術を学んだカプーアは、1970年代後半より作品を発表し始める。初期には、表面を顔料で覆う立体作品を多く制作するが、それらは次第に内部をあらわにするようになる。岩盤のような床に切り込みや穴を開け、その内部を顔料で覆うことにより、洞窟の入り口や大地の亀裂を思わせる作品へとつながっていく。また、ステンレス・スチール、漆といった素材、蒸気そのものを作品に取り入れるなど、多様な表現を展開してきた。これらの作品は、常に我々の視覚や日常的な認識の再考を促す。次元を越えて生み出される未知なる世界像には、人間存在、生命へのカプーア独自のまなざしが映し出されている。



アニッシュ・カプーア《L'Origine du monde》2004
楕円の長径：700cm
© Anish KAPOOR

※本作品は恒久展示作品でもある

イザ・ゲンツケン Isa GENZKEN

1948年バート・オルデスローエ（ドイツ）生まれ、ベルリン在住。

1980年代初頭、床置きの大掛かりな彫刻で注目を集める。その後、油彩、写真、映画など多岐にわたる媒体を用いながら作品を制作。荒々しさと繊細さ、開放性と閉塞性、透明性と不透明性など相反する2つの概念をひとつの俎上に載せるような作品を作り続けている。緻密な計算と意外性を併置して、その両者の均衡をとろうとする作家である。



イザ・ゲンツケン《ベルリンのための新建築3》2001
ガラス、粘着テープ、シリコン
H80×W20×D16cm
© Isa GENZKEN
photo: SUEMASA Mareo

フィオナ・タン Fiona TAN

1966年プカンバル（インドネシア）生まれ、アムステルダム（オランダ）在住。

中国人の父とオーストラリア人の母の間に生まれ、オーストラリアで育つ。1988年にオランダに移住。アムステルダムの国立美術学校で学ぶ。1997年、世界中に離散した自身の家系を追うドキュメンタリー・フィルムで注目されて以降、主に映像を媒体とした作品を発表。古い記録フィルムの断片やテキスト、タンが撮影したイメージを作品の中に織り交ぜ、新しい物語や独自の映像言語を創出している。



フィオナ・タン《リンネの花時計》1998
ビデオ
17分
© Fiona TAN
Courtesy of the artist, Wako Works of Art, Tokyo

福本潮子 FUKUMOTO Shihoko（前期）

1945年大阪府（日本）生まれ、京都府在住。

京都市立美術大学（現京都市立芸術大学）西洋画科卒業後、ニューギニアの民族美術の学術調査に加わったことから日本の伝統的美術に興味を抱く。帰国後、龍村美術織物研究所で勤務する中、藍染と出会う。藍を独学で学び、染めの過程に取り組む中で徐々に自身の方向性を見いだした。藍染に絞りの技法を主に用いるが、グラデーションのみのシンプルな表現も多い。能や茶道などと密接に関わる空間・造形表現も数多く手掛けている。



福本潮子《霞の幔幕》2002
藍染、麻、レーヨン紐
H200×W1000cm、H200×W1100cm
© FUKUMOTO Shihoko
INAXギャラリーでの展示風景（2003年10月1日～10月29日）

ツェ・スーメイ TSE Su-Mei (後期)

1973年ルクセンブルク生まれ、ルクセンブルク、パリ（フランス）在住。

幼い頃より音楽とともに生きてきたツェ・スーメイは、音楽演奏の核である、身体、音、技術、自己を取り巻くあらゆる事象との関わりや融合にみる世界を起点に、多様な作品群を生み出している。映像作品において音楽的要素が直接的に表される一方で、彫刻、インスタレーションといった手法の作品においても、素材、自己、技術、対象の融合から生み出される世界、形に焦点が当てられている。このような世界像を根底に据えながら、近年では野外での公共彫刻も手掛け、多様な制作活動を展開している。

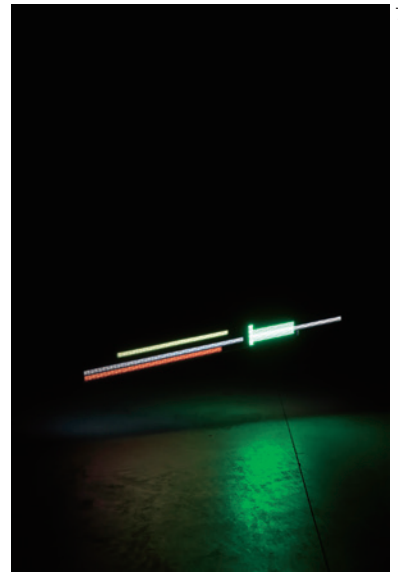


ツェ・スーメイ《エコー》2003
ビデオ・プロジェクション、音
4分54秒ループ
© TSE Su-Mei

チェン・ウェイ CHEN Wei

1980年浙江省（中国）生まれ、北京在住。

チェン・ウェイは中国の一人っ子政策、改革開放政策以後に生まれた「80後」世代を代表するアーティストのひとり。劇的な経済成長と空前の不動産投資ブームが作り出した中国社会の幻像と実態とのギャップを、主に写真というメディアを用いて写し出し、社会に対する個人の視点の在りかや、世界と個人との関係を客観的かつ鋭敏に問い直している。



チェン・ウェイ《道端のマレーヴィチ》2016
LEDスクリーン、スチール
H16×W202×D16cm
© CHEN Wei
Courtesy of the artist and Ota Fine Arts,
Shanghai/Singapore/Tokyo
photo: KIOKU Keizo

ペーター・フィッシュリ Peter FISCHLI

ダヴィッド・ヴァイス David WEISS

ペーター・フィッシュリ：1952年チューリヒ（スイス）生まれ、同地在住。

ダヴィッド・ヴァイス：1946年チューリヒ生まれ、2012年同地にて逝去。

1979年、身近な食品を用いて日常を再現した写真「ソーセージ・シリーズ」を発表。概念主導の美術動向の中、支配構造への反発たるパンクの精神を備えた彼らは様々なメディアを柔軟に操り、身近な素材と明解な仕掛けという手法により、自身の技術の範囲内で膨大な時間とエネルギーを注ぎ、綿密さと偶然性によって制作。卑近な物事に目を向け、元来の用途を「誤用」し、意味や解釈の多様さを提示する。既存概念を検証、批評し、新たな価値を見いだすとともに、世界と関わるということ、物事は常に相対的であるという世界観を象徴的に示す。



ペーター・フィッシュリ ダヴィッド・ヴァイス《クリン クロン》2010
サウンド
© Peter FISCHLI David WEISS
photo: WATANABE Osamu

ス・ドホ SUH Do Ho

1962年ソウル（韓国）生まれ、ロンドン（英国）在住。ソウルで東洋絵画を学んだ後、1991年に渡米し、ロードアイランド・スクール・オブ・デザインとイエール大学で学んだ。1999年に始まる、かつて暮らした家やスタジオを、透過性のある布で拡大・縮小し再現するという一連の作品には、これまでの人生において幾度となく移動を繰り返してきた自身の経験が反映されている。持ち運びできるこれらの家は、異文化間の境界を越え、空間とは、必ずしも特定の場所に固定されるものではなく、私たちに付随して移動するものであることを示唆している。



ス・ドホ《階段》2003
透明ナイロン
サイズ可変
© Do Ho Suh
Courtesy of Do Ho Suh and Lehmann Maupin
photo: KIOKU Keizo

関連プログラム

※後日ウェブサイトにてお知らせいたします。

市民無料の日

美術奨励の日

会期中の毎月第2土曜日

11月14日、12月12日、2021年1月9日、2月13日、3月13日、4月10日、5月8日

市民美術の日

11月3日

※上記の日には、金沢市民の方は本展を無料でご覧いただけます（要証明書の提示）。

広報用画像

画像1～9を広報用にご提供いたします。ご希望の方は下記をお読みの上、当館プレスルームの画像提供ページからお申し込みください。

https://www.kanazawa21.jp/form/press_image/

[使用条件]

※広報用画像の掲載には各画像のキャプションとクレジットの明記が必要です。

※トリミングはご遠慮ください。作品が切れたりキャプション等の文字が画像にかぶったりしないよう、レイアウトにご配慮ください。

※情報確認のため、お手数ですが校正紙を広報室へお送りください。

※アーカイブのため、後日、掲載誌（紙）、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。以上、ご理解・ご協力のほど、何とぞよろしくお願いいたします。